

CoCキャラが、ダンまち  
の世界に来たようです。

みかん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「また、いつものか!」と継続キャラが、ダンまちの世界に放り込まれた。そんな妄想です。

# 目次

COCキャラが、ダンまちの世界に来た

ようです。

1

第2話

8



# COCキャラが、ダンまちの世界に来たようです。

窓から、窓の表面から現れた黒い手によつて、貴方は沈むようにガラスの奥へと引きずり込まれました。

「またか」

もう何度、このような唐突で奇妙な体験をしたのか解らない。

暗い部屋の中で、奇妙なスープを飲まされたり、平行世界に飛ばされたり、謎の施設の手術台で目を覚ましたり、神殿の中で数人の仲間と脱出したり。

グロテスクな神々との遭遇、化け物達の狂宴への招待状、狂気に満ち溢れた伝説と向き合わなければいけないのだろう。

これは冒険の始まりである。

奇妙で、恐ろしく、悍ましく、不可解で、我々の理解を越えた世界へ誘う始まりだ。

……ただ、もういい加減平穩に生きさせて欲しい。もう放つておいて欲しい。

人間、人生で一回経験出来るか出来ないかの無茶苦茶な冒険を、幼い時より何度繰り広げたことか。何回死んだと思つたことか。何回精神に異常をきたしたことか。

今回で何回目だよ。もう覚えてないよ。またかよつて惰性に包まれてるよ。おのれ、

ろくでもない神々め。またニヤルラトホテプか。また異貌の神か。あいついい加減にしろ。

サンデーの某名探偵マンガのように、毎回事件に巻き込まれるおかげで、目出度く留年一年目である。そして、もう少しで二年目の道も見えてきた。

もう最近は何も怖い神々よりも、恐ろしい儀式よりも、二年目の留年のほうが怖い。目が覚めたら時間が経っていない事もあるが、中には一ヶ月失踪していたなんてこともあるのだ。最長は半年、現実への影響はお察しのとおりである。私の人生プランはとつくの昔に銀河の彼方に消え失せている。

「ああ、また神隠しにあつたんですね」と先生に呆れられる気持ちだが、あいつらはわからないのだろう。友人に「お、今度は二週間で戻つてこられたんですか」と言われる悲しさが、あいつらにはわからないのだろう。飛ばされる世界の時間軸がおかしいおかげで、二十歳を超えても容姿が中学生の悲哀が、あいつらにはわからないのだろう。

殴つてやる。神々（おまえら）にもらいまくつた加護の拳で殴つてやる。変な薬を飲み、飲まされ、変な本を読み、変な儀式に掛けられ、修羅場を越えて生き残つて成長した人間の強さを見せつけてやろうではないか。

樹齢百年を超える木を破砕する拳、化物を圧倒するマーシャルアーツ、火災の中から助けた子供にドン引きされた跳躍。

「実はお前、異貌の神々が化けた存在じゃないよな」って最近疑われている私の怒りを、思う存分ブツケてやる！

私は人間だボケ！全部お前らのせいだ！彼氏が出来ないのも、ゴリウーマンって陰口叩かれるのも、年齢詐称と噂されるのも、全部お前らのせいだ！またぶつ潰してやる！  
貴方はそう固く決心し、意識を失ったのでした。

シナリオ、『神々のダンジョン』をこれより始めていきたいと思います。

■ ■ ■  
暗く、静かな洞窟とも思える空間の中で、一人貴方は佇み、考える。

「……あれ？おかしいなあ」

下に散らばる化物達の死骸を余所に、貴方は首を傾げた。

そう、化け物達の死骸である。

潰れた顔に、平べったく長い鼻。三日月のように大きく裂けた口からは、鋭い歯が幾つも並んでいた。子供のように背丈は小さく、緑の色の肌はそれが人間ではないことをはつきりと教えてくれるだろう。

手には錆びたナイフや剣、荒削りの棍棒を持つ彼らは、貴方の知識によってゲームやマンガで見るところの『ゴブリン』と似通っている事が分かる。生物学的に観察しても、それは地球の進化の中で生まれた生物とは言い難いものである。

が、そんなことは些細な問題だ。

こんな存在の発見など、日常茶飯事であるからだ。

目の前にウサギがいるからって、そのウサギが話したからって、そのウサギが霧になって姿を消したからって、特に驚くべきところは見当たらないだろう。貴方にとってはよくあることだからだ。そういう存在だったのだろうと納得できる。

同じように、目の前の小さな化け物達を貴方は自然に受け入れたのだ。変な匂いもしないし、変な魔眼も、呪文も使わない。ただ襲い掛かってくることなど、何を怖がり気にするところがあるろうか。

これがこの世のものとは思えないほど美しい女性や男性であったり、人の心を見通せると噂される貴方の心理学が、全く機能しない存在であれば話は別だ。だが、そういうこともない普通の化物である。

襲い掛かってくるなら、そしてその化物に会話が通用しないようなら、化物はぶっ飛ばすものである。逃げるのは面倒だ。

彼女は安心して遠慮なく化物をぶっ飛ばした。

グールどころか、ムーンビーストすら格闘技で圧倒する貴方にとっては、小さな化物の相手など造作も無いことであった。最早それは戦闘とすら呼べない、圧倒的なものであった。



途中逃げ出した化物達であったが、容易に追いつかれ、首から上が掌底によって吹き飛ばされる。意を決して挑みかかっても、同胞の死骸を盾にされ、投げられて攻撃は届かず、終いには彼らの身体は蹴りによって、枯れ葉のようにクルクルと宙を舞った。

そんな蹂躪が繰り返されること数回、その度に貴方の足元には無数の死骸が転がることとなったのだ。

もう見慣れた死骸を気にするほど、貴方は暇ではない。このおかしな状況を脱すべく、頭をぐるぐると回転させて考える。

「鍵となる人物も動物もない。何か示したり表したりするメモや蠟燭もない。化物が現れる規則性も無い。ただただ、こんな洞窟が続いているだけ。地質学で分かったことは、ここが広大な空間で上や下にも同じようなものがあるって事ぐらい。でも、全然道がわからないしなあ」

言つてしまえば、序盤の街でひたすらザコ敵相手にレベリングするようなもの。

謎解きもなく、ヒントもなく、心を削られることもなく、時間だけが化物相手に消化されていく。

こんなに面白みがない世界を、わざわざ彼らは創るのだろうか。

わけがわからないとばかりに、貴方は天を仰いだ。

思えば、最初からここはおかしかった。貴方は襲いかかる狂気も、悪意も、悍ましき

も、何かの意志も、この空間から感じる事ができなかったからだ。

あいつらにとつて、自分は玩具でしかない。遊んで遊んで、壊れたらハイおしまい。そうじゃなかったら、またこれで遊ぼうじゃないか。そうやってニヤニヤと嗤い喰らう、何者かの悍ましい悪意が、これまでのどの事件や世界でも感じられた。

しかし、そういう悪意をここでは感じられない。

箱庭に投げ込んで、意味もなく放置プレイ状態では、気味が悪いと思ったらありやしない。そんな連中でないことは、これまでの経験で十二分に理解している。なんだこれは、これまで無いパターンじゃないか。

「こりゃあ、きつとデカイ一発がくるんだらうなあ」

ああ、とため息を吐き出す。その時であった。

尖らせていた神経、感覚が貴方に何かを告げた。

聞き耳だ。微かな音も逃さない、集中して耳を澄ませた。その結果、貴方は此方に何者かが走ってくる音を聞いた。

さらに貴方は情報を得ることが出来る。その足音に余裕は感じられず、必死に何かから逃げるように全力である様子が感じられた。大きな何か洞窟を踏みしめ、それを追いかける音も聞き取ることが出来た。

不安、恐れよりも先に、貴方は安堵を覚えた。ああ、ようやく何かを理解する切っ掛

けが出来たのだと。人の理解が及ばない世界で、理解できることが見つかることは、救いであることを彼女はよく知っていたのだ。

「んー、知らず知らずのうちに、何か琴線にふれることをしていたのかな。まあ、事態が動くならなんでも良いや。このまま餓死つてのが一番問題だったからね」

小さな足音。大きな足音。未だ現れぬ何者かに対して、貴方は何の感情も見えない顔で向き合う。

その手にはいつの間にか、光り輝く奇妙な本が姿を表していた。青とも赤とも、黄とも言えない淡い光。まるで宇宙で煌めく星々のような不思議な光が、貴方の横顔を照らした。

## 第2話

ベル・クラネルは人生災厄の日はいつかと尋ねられたら、それは今日だと彼は答えただろう。

自分が目指す理想のためにダンジョンに入り、いつも通りモンスター達と戦っている最中。彼は恐ろしいミノタウルスと遭遇したのである。

本来、ミノタウルスは地表に近いこんな所に現れるモンスターではない。もっと下の階層に存在する恐ろしいモンスターだ。それが何が起こったのか、こうして追い回されることになってしまった。

ベルのレベルはたったの1しかない。ゴブリンなどの弱いモンスターと戦うことで精一杯な自分が、中級冒険者すら時には殺してしまうミノタウルスに勝てるわけがない。

ベルの胴体ほどもあるミノタウルスの太い腕が当たってしまったえば、防げたとしてもそのままぺちゃんこになってしまっただろう。あつという間にミンチの完成だ。

必死の形相で、汗が流れるままに走る。走る。走る。

身体が悲鳴をあげ、込み上がっている胃液を必死に飲み込みながら逃げ続けた。出口

はどこかなど、考えられる余裕すら無かった。ベルは追いかけられるままに走るしかなかったのだ。

いつこの逃走劇は終わるのか。終わりはどんな終わりを迎えるのだろうか。そう考えたら怖くてたまらない。宛のない闘争に、諦めてしまおうかとさえ思った。

帰りを待つ神様の笑顔が頭に思い浮かんだ。祖父と語り合った理想と思い出が頭を過ぎった。それだけが孤独に戦う彼の心を励ましとなり、生きるチカラとなっていた。

しかし生きたいという思いがいくらあっても、彼の身体は限界を迎えつつあった。

このままミノタウルの餌食となり、夢も理想も消え果ててダンジョンに飲み込まれるか。

「……………」

歯を噛み締め、もう限界だと死を意識し始めた。その時であった。

彼の耳に不思議な声が聞こえた。

女の声、それも幼い。まるで泣いているかのように悲しく、そしてほえるようにそれは洞窟の中を木霊して響いた。

一直線に続くダンジョンの先、暗く見えなかったその先から、この声は此方へと伝わってくる。

「ッ！逃げるんだッ！こっちに、ミノタウルスが…………ッ！」

ベルは自身の残り少ないスタミナ、そして危機を顧みずに叫んだ。無意識であった。少女の声が聞こえた時に、彼は自分の身よりも彼女を優先したのだ。それは英雄的な、尊い行いだった。

先にいる何者かに彼を追うミノタウルスを押し付けければ、少しは彼が生き延びる可能性もあつたかもしれない。実際、そうやって見ず知らずの冒険者にモンスターを押し付けて、自分は逃げる輩の存在というのは、このオラリオでよく聞く話であつた。

だが、彼はそんな事を考えられるような人間ではなかつたのだ。危機にあつたとしても、自分よりも他者を想う素晴らしい優しさを持つていた。

そしてその優しさが、ベルの運命を決めた。

注意が一瞬切れたことによつて、限界をとつくに迎えていた足が地面に躓いた。

激しく転倒し、ダンジョンを転がった。衝撃に思考が上手くできず、視界が揺れて定まらない。

「……………う、あ」

苦痛に溢れる声。呼吸すらままならない有様だつた。

そんな中で、彼は自身に覆いかぶさる大きな影に気づく。痛みに歪む顔を何とか持ち上げて、それを見上げた。

鼻息を荒くし、目を爛々と輝かせたミノタウルスの姿がそこにあつた。

振り上げられる筋肉隆々の巨腕。その手には自分を押し潰さんと握られた武具。

「…………ツ！」

目を瞑った。襲い掛かってくるであろう、大きな衝撃を想像して身体が強張った。死を覚悟した。

「…………？」

だが、いくら待ってもその時は訪れなかった。

恐る恐る、目を開く。

そこにはミノタウルスが腕を振り上げたまま固まっていた。ベルは短い悲鳴を上げて、這うように逃げようとする。

いつその掲げられた武具が、振り下ろされるのか解らない。ああ逃げなくてはと、痛む身体にムチを打って進もうとするも、逃げて疲れ果てた身体は思うようには動いてくれなかった。

不味い。

焦るベルの視線が、ミノタウルスと交わったその時。

大きな声がダンジョンをこだました。

「GUGYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAツ!?!」

それはミノタウルスの口腔より飛び出た声であった。

あまりの大きさに、思わずベルは自分の耳を塞いで蹲る。

「い、いったい何が」

怯えすくんだベルが、ミノタウルスを見つめた時。それは起こった。

ミノタウルスの全身が震える。手から武具がこぼれ落ち、それを気にすること無くミノタウルスは全身をかきむしり始めた。

見ればミノタウルスの皮膚の表面が黒ずみ、斑点が至る所に生じていた。さらにそれは隆起し、弾け、さらには泡立ち始める。

苦悶の表情を浮かべたミノタウルスは悲鳴を上げると、立っていることが出来ずに倒れてダンジョンを転げ回った。地表は黒ずんだミノタウルスの血で塗れ、肉が腐るような独特な匂いがベルの鼻にツンと響く。

あまりにも不可解な現象に、ベルの視線は釘付けとなっていたが、彼は先ほどから聞こえていた声が、より自分のところへと近づいている事に気がついた。

ミノタウルスの大きな悲鳴の中で、ベルは小さな足音を聞き、唾然としたままに振り向く。

「……えっ？」

そこには、小さな少女の姿があつた。

黒髪黒目の珍しい様相は、話に聞く東方の出身であるかのように思える。



問題はオラリオの街では見慣れない服装。街中に買い物に出かける時に来ていくようなそれは、ダンジョンを探索するのにもあまりにも不適切な服であることは、ベルの目にも明らかであった。

さらにベル見る限りでは、剣や斧といった武器を身に着けておらず、杖も持つてはいなかった。身軽な装いから、サポーターである事もないだろう。それ以前に、ダンジョンに潜る最低限の飲食物を持つているようにも見えない。着の身着のままだ。

ダンジョンに現れた、不可思議な少女。その口は絶え間無く声を紡ぎ続けており、よく聞けばそれは歌のようにも感じられた。

まるでおとぎ話、夢を見ているかのような非現実的な光景に、ベルは混乱するままにその姿を目に刻む。そしてより一層激しくなったミノタウルの悲鳴、最早絶叫とも言えるそれを聞いて我に返った。

ベルは慌てて振り返り、息を呑んで固まってしまった。

それは悲惨極まりない光景であった。

ミノタウルの体中が隆起しうねり、皮膚が溶けて見える筋肉の上でも、気泡が生まれて弾けていた。既に全身が泡立っており、皮だけではなく肉までもが溶けてグズグズとなっている。

激痛に襲われるミノタウルの目は、既に正気を保っているようには見えなかった。

大きく開かれた口の中にも、気泡が生まれて弾けているのが見て取れる。

ついには声も出せなくなったのだろう。声にならない声を上げ、地表を転げ回る力も無くなり、まるで芋虫のようになってしまった。

その視線がベルと交差する。何を思ったのか、全身から腐った血の匂いを漂わせたミノタウルスが、震える手でベルへと手を伸ばした。それはあまりにも弱く、滑稽で。ベルはこれがほんのすこし前まで自分を追いかけていた、あの強いミノタウルスには思えなかった。

「……あ」

その目が助けを求めるものだと思われ、ベルが気がついたその時、ミノタウルスの身体はまるで風船のように破裂した。一瞬全身が膨れ上がったかと思うと、パンっという湿った音と共に水風船のごとく、ドス黒い血を周囲に飛び散らせる。

おびただしい量の血がベルにかかり、彼は一瞬にして血だらけとなってしまった。

精神的ショックで固まるベル。

少女の声は聞こえなくなっていた。此方に歩み寄り、隣に並んだ少女を呆然と見上げる。

「……うーん、グロテスクさがないクリーチャーですね。格好良さすら感じますが、どこの眷属だったのでしょうか」



「——え」

「大きく息を吸って、吐いてください。大丈夫です。もう何も起こりません。私は何もしません。貴方は大丈夫です」

それは根拠のない言葉であった。

何も起こらない保証もなければ、少女が自分に何かしない保証もない。

この現状を考えれば、どんな馬鹿でもその事実には気がつくはずであった。

「ほら、大きく息を吸って吐くんです。深呼吸ですよ、大事ですよ、ゆっくりでかまいませんから。……ね？」

優しげに微笑む少女。

その姿を見て、その声を聞いたベルは、何故か彼女の言葉が本当の事だと思えてならなかった。

自分を案じる言葉に、あれだけ掻き乱されていた心が徐々に落ち着き、深呼吸を重ねることで高ぶった精神も落ち着いてくる。

「……落ち着きましたか？」

少女の言葉に、ベルはゆっくりと頷いた。

その様子を見て、少女はほっとしたように胸を撫でる。

その安堵は少年、ベルが落ち着いたので生じたものではなかった。彼が助かったから

という理由でもなかった。この少年を攻撃しなく良かったという、安堵からくるものであったのだ。

暗闇の先を見て解った、化物と少年の存在。

自分は動くべきなのだろうか。隠れるところはなく、この光景から逃れるすべはない。第一、もしこれを見逃せば少年の命がない事は、彼女の観察から明らかであった。となるとだ。

重要になるのは、敵対する二人のどちらに味方するのかであった。

彼女の判断から、呪文を唱える時間は十二分にある。距離を考えても、確実に先制を取って攻撃できるだろう。一度攻撃できれば、彼女の呪文はそのまま相手を殺すことができる。

だが、どちらを攻撃したら良いのだろうか。

ベルは知らないだろうが、彼の命は「人型は神が化けている可能性が高い」という理由で救われたのだ。

化物は見たままの存在であり、例えば知性があってもそれ以上の存在と成る可能性は、彼女の経験からして極めて少なかったのだ。

見た目通り強く、悍ましい存在であったとしても、彼女にとってはその範囲を出ないのである。その程度であれば、いくらでも対応してこれた。

しかし、人間であった場合は判断が難しい。自分と同じように迷い込んだ存在かもしれないし、神々の端末や神々自身が化けた存在かもしれない。しかも人をかたどったとなると、役割や駒としてお気に入りへの可能性も高い。

それを傷つけてしまったら、大きな災と報いが自分に訪れることになる。逃れるのも、弁解するのも、生き残るのも大変になってくるだろう。

その結果、彼女は少年を助けることに決めたのだが、どうやらそれで正解だったらしい。

だが彼は混乱と狂気に陥っており、とつさに精神分析を行って助けたことは愚かな行いであった。

もし彼が神であったのなら、その心を覗いたことで人間としてのキャパシティが限界を迎え、自分の精神は狂気と恐怖に蝕まれてしまったかもしれないからだ。

結果的には人間、もしくはそれに準ずる状態の生き物であったから助かったが、これからは気を引き締めねばならない。小さなミスが、自分と世界の命運を分けることを貴方は知っている。

この少年らしき存在との出会いが、恐ろしくも悍まじき旧支配者達の演劇の開幕となる。そう彼女は直感した。

「えーと、キミの名前を教えてくださいませんか」

「べ、ベル・クラネルです。あ、貴方は……」  
「あー、外人さんかな。私の名前は――」